# 地域のピンチを福祉のチャンスに
# ～困った同士を結びつける地域化学反応～

大原 裕介 さん（社会福祉法人ゆうゆう　理事長）

## 社会福祉法人ゆうゆう

“社会福祉法人ゆうゆう”は、子どもからお年寄りまで、障がいのあるなしに関わらず、あらゆる人が支え、支えられる地域づくりを目指して一歩一歩夢を実現してきた。なかでも、地域共生型拠点事業を平成 20 年度から整備し、地域共生型オープンサロン「ガーデン」や共生型コミュニティ農園「ぺこぺこのはたけ」など、地域住民と一緒に行う活動に力を注ぎ、その先進的な取り組みに全国から視察に来る人も多い。ゆうゆうに関わるすべての人にとって、よりよい仕組みを創造する。それがゆうゆうの理念である。

### ■「地域に創る」ではなく、「地域を創る」

“ゆうゆう”は、限られた空間で完結するものを「地域に創る」のではなく、様々な福祉アプローチにより「地域を創る」ことを目指している。福祉を福祉で完結するのではなく、たとえば、福祉だけでなく、農業、教育、観光、芸術など、いろいろな産業や分野が連携する。地域に暮らすすべての人が世代を超えて支え合う。そんな仕組みを、ひとりひとりのニーズに合わせて社会資源を創ってきた。

### ■平均年齢、20 代後半！　全国各地から若者たちが過疎地に集結！　就職倍率５倍以上

職員は 20 代、30 代の若い人がほとんどで平均年齢 28 歳。昨年度は会社説明会に全国各地から 100 名近くが集まり、最終的には 10 名採用枠で就職倍率は 5.5 倍！人口減少や超少子高齢化社会による衰退が顕著に現れる小さな自治体に若者たちは集まる。「自分たちの手でこの地域をどうにかしたい」。地域や社会を良くしたいという若者たちは、成果がわかりやすい過疎地に魅力を感じるのであろう。もちろん若者たちの誘致にはお金も時間もおもてなしにも手は抜かない。誰かに必要とされるという実感が仕事から感じている先輩の姿や言葉も後押しをしている気がする。

## あらゆる人が支え、支えられる地域。

“ゆうゆう”は 2003 年、北海道石狩郡当別（とうべつ）町にある北海道医療大学のボランティアセンターとしてスタートした。障がいのある子どもたちのレスパイトサービスを１時間 400 円で空き店舗を改修してスタートしたのが、ぼくが大学４年生の時だ。大学院に進学し、NPO 法人を起業するまで、３年間このサービスを続けてきたのだが、

支援者である大学生と障がいのある子どもたちが過ごす空間に異質性を感じていた。ただ、お母さんたちは自分の子どもに障がいがあることを隠したいが故に、外に出るサービスを嫌がったりもされた。メディアなんかに出るとモザイクをかけて欲しいとクレームも受けた。福祉を福祉で完結してはダメ。結局、障がい者が特別な人に扱われるのに加担しているのは自分たちであることに気づいた。特別な人のための福祉ではなく、あらゆる人が支え、支

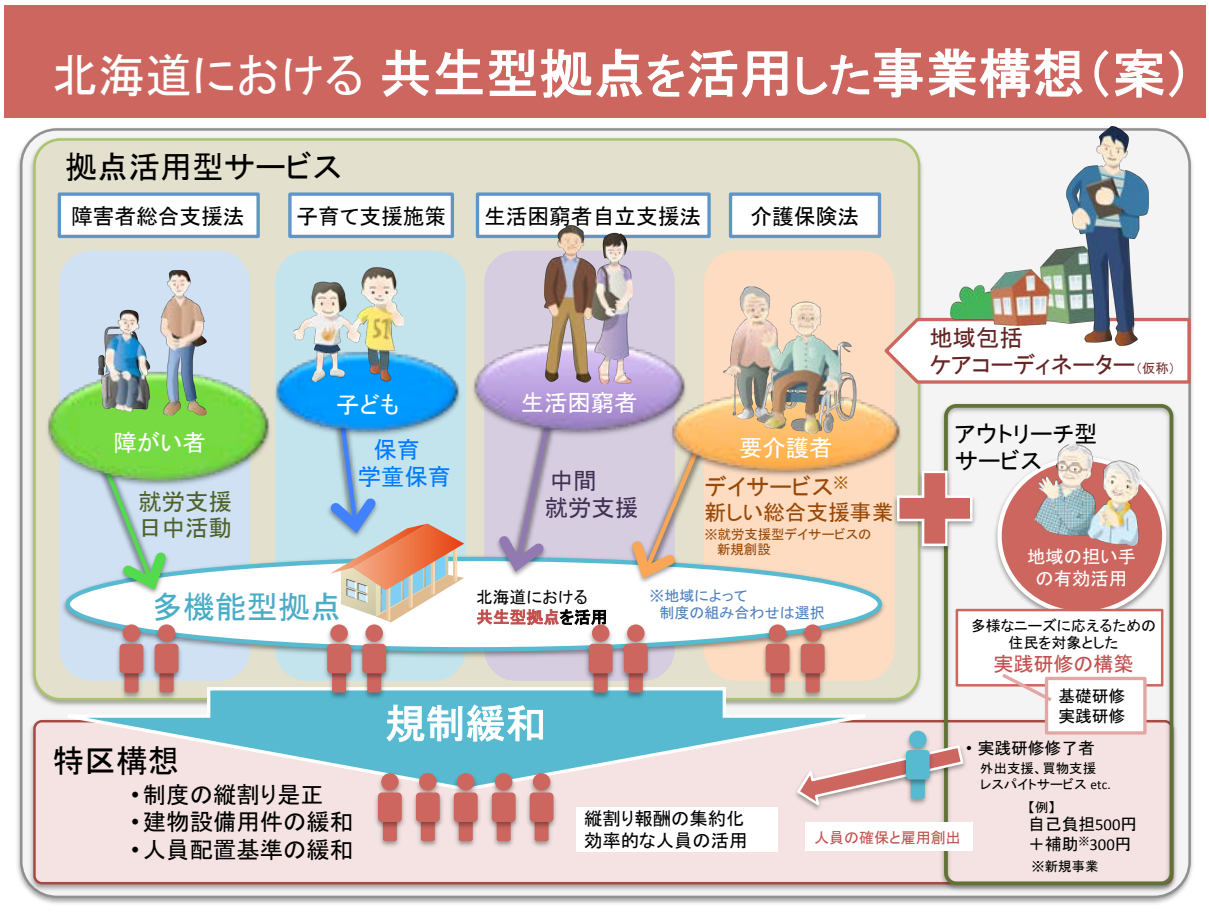
えられる地域を目指す、福祉の価値観を変える挑戦を始めた。ここで生まれたのが共生型福祉拠点の整備である。

このサービスを創る背景には、もう一つ理由があった。障がい児のためのレスパイトサービスに赤ちゃんから不登校の子ども、認知症の方々の預かりや学習支援、外出支援の依頼が殺到した。もっとも困ったニーズに合わせたサービスはあらゆる住民を包み込むサービスになると実感した。NPO 法人起業のあとも、公的なサービスの合間を縫って、様々な住民の方々に対するインフォーマルサービスを展開してきた。使命感でサービスを提供する一方、正直早くこれを仕組み化しないと持続していかないという不安もあった。

## 共生型地域福祉拠点の整備

平成 20 年に地域福祉ターミナルと地域共生型オープンサロンを国庫補助により整備した。地域福祉ターミナルは、「インフォーマルサービスのワンストップ窓口」である。なかなか口説くのに苦労したが、まちの保健センターにある社会福祉協議会のボランティアセンターを移設させ、ゆうゆうの大学生ボランティアセンターと統合し、ボランティア窓口のワンストップ化を図った。なかなかお互いにいがみ合っていた仲なのにテーブルを並べると困ることをお互いに補填し、強みをより強化できる関係になる。現在ボランティア登録者数は人口 10%の 1700 名を超えている。人口が減っているがパーセンテージをあげていることにつながっているのも複雑な気持ちだ。

この拠点には病児保育まで含めたファミリーサポートセンターや公的サービスでは補えない生活支援を研修（座学・実習 30 数時間）受講した住民の方々がサービス提供を行うパーソナルアシスタ



ント制度など包括的なサービス資源を構築した。このことにより職員が合間を縫ってになったインフォーマルサービスのシステム化を図ることができた。今後、この成功体験をもとにわが町では、地域包括支援センターにあらゆる分野の相談支援等を設置するワンストップ相談窓口構想が掲げられている。

もうひとつ特徴的なのは誰もがふらっと立ち寄ったり、ご婦人のフラダンスサークルから中学生のヒップホップチームまであらゆる方々が使えるフリースペースを設けている。このスペースが日常何気ない人と人との交差点の機能を果たしており、写真にある発達障がいのある子どもとひとりでの碁打ちを好まれるデイサービス利用者もここで出会った。学校に馴染めない子どもとデイサービスに馴染めない高齢者が碁を通じて、心を通わした。子どもは高齢者の自宅に行くこともあり、立派な見守り隊の一員として活躍する。高齢者は発達障がいの子の良き理解者であり支援者となる。「困っている人同士を結びつけると、困っていた方が困っている人を助ける存在になる。」私たちが考える共生型の理念はここにある。

地域共生型オープンサロンは、障がい者の就労拠点と高齢者が駄菓子屋さんなどで店番をする介護予防事業と子どもたちの放課後の溜まり場と生活困窮者の就労中間就労体験の場として機能している。特にここで特徴的なのは、高齢者が働いているということであろう。駄菓子屋の店番は値札付けと勘定計算は頭の体操。何より子どもたちや障がい者たちがみなさんを頼りにする。自分がいなくては何もできないと、誰かに必要とされていると、こんな自分でも役割があると、まだまだ介護保険を利用するに至らないが、自宅でひっそりと暮らし続けている皆さんはここに来ることが生きる希望だとおっしゃる方もいたりする。最近の若者は、今の子どもたちは、私たちにはわからない、と言っていた方々が、子どもたちとのコミュニケーションを通じて、当別の子どもたちは素直だと、誇りであるという。無論、子どもたちにとってもこのやり取りに意味がなされていることは言うまでもない。地域で子どもの心と体の安心を守る関係性がここにあったりする。今年度から子どもたちの学習支援と子ども食堂を始める予定である。

もうひとつ紹介したい拠点は、地域共生型コミュニティー農園ぺこぺこのはたけである。当別町の基幹産業である農業を振興していくことも目的に含め（農福連携事業）、地産地消にこだわった和食レストランに障がい者が働いている。この事業の監修は銀座で飲食店を営む友人に依頼し、東京という言葉に弱い北海道人の心をつかんだつもりでいる。この建物はレストランスペースの他に土間スペースを設けて、食材を確保するために併設した畑で作業する方たちの休憩場となっており、麦茶片手に皆が労をねぎらう。皆というなかに、要介護３の認知症

の 90 代の高齢者も含まれる。７０数年農業を営んでいたこの方にとってデイサービスに通うよりもどうやら楽しいらしい。1 分前のことは忘れているのに農業に対する知識は衰えていないどころか、鍬を持つと転倒の危険性など微塵も感じない。先に紹介した元気な高齢者のみならず、認知症になったってお仕事はできるのである。そして、そのなかで団塊世代の男性たちも汗をかいている。ぺこぺこのはたけを応援する「ペコちゃんクラブ」は 20 数名の男性たちばかりのグループである。月に一度、イベントを企画するためには、週に 1 回の一升瓶を片手にしたお昼間からの打ち合わせは欠かせない。農作業からイベントの企画運営、打ち合わせ会がこの方々にとって地域とつながる手段であったとある方から聞いたことがある。

## 縦割りのサービスから横串のサービス

いままで紹介してきた地域共生型拠点事業をこれまで実践してきて、過疎地にいるぼくらは、対象者を限定したサービスに違和感を感じることがある。もちろん、特別なニーズ（例えば強度行動障がい者など）がある高度な専門性と合理的配慮が求められる方々を除くと、支援者の確保やキャリアアップの視点、既存の施設などの有効活用、人口減に伴う利用者の減少、そして何より利用者にとって好ましいサービスの選択など「横串」のサービスによる事業展開の方が有益なことが多いように思われる。ただし、この議論は、効率的なサービス提供による安上がりの福祉サービスの構築を論じるものではない。むしろ、特定分野の専門職が多岐にわたるサービスを提供した際に支払われる報酬を給与に上乗せしていく仕組みでなければ意味はなさない。当然ながら、そのような展開をしていくためには、新たな人材育成のスキームが必要である。私たちの専門性がより多くの方々に届けられる社会サービスの創設に向けて解決すべき課題はあるが、実効的且つ建設的な議論の必要性を現場にいて強く思う。

そういえば。最後に付け足しがありました。１０年前のわが町では障がいのある子どもたちのお母さん方がメディアに出るのを嫌がっていたと書きましたが、今では「なんでうちの子、写ってないの！」なんて怒るようになったのです。福祉では完結させない地域共生型拠点整備事業のひとつの功績かもしれません。